

看取りの体験談

松江十郎（仮名）

私自身の看取り体験ではありませんが、今から50年近く前に亡くなった義父（家内の父）の人生最終章の様子を鮮明に思い出します。

義父が亡くなったのは1973年9月初めでした（享年85歳）。その頃私は転勤で家族ともどもニューヨークに居住していました。確か同じ年の7月末私の母からの電話で、義父の容態が急激に悪化し、また眼病を患っていた義母も完全に視力を失ったことを知りました。中年の頃ドイツに留学し、その後ハンガリーに移動し10年以上に亘り長期滞在していた時発症した慢性気管支炎の悪化に加え、高齢化と過労（後述）のため心臓が衰弱し、不治かつ末期の症状に至ったのです。

自宅で義父を看病・介護していた義母も限界に達し心細いであろうこと、義父母とも3年近く会っていない娘（一人っ子）・孫に会いたいであろう状況が目に見え、それに加え私の脳裏をよぎったのは、義父のライフワークのことでした。

学問好きではありましたが、大学卒業後、大学・役所・大企業等の強力な組織に属さず社会・文化研究所等のフリーランサーだった義父は、水があつたハンガリー滞在が長くなりました。経済的安定はなかったものの、歴史、文学、言語を通じ日本とハンガリーの文化交流にいささか貢献してきたと自負していました。

そのような義父の最後の望みはハンガリー語辞典（洪和辞典）の編纂だったのです。1956年のハンガリー動乱で帰国した後も含め、三十数年をかけてこつこつと古典的なカード方式で積み上げてきた原稿を1973年3月末にやっと完成させて出版元に渡すことができたところでした。最後の原稿校正は時間や病魔との闘いで、老骨にムチ打ったことでしょう。ハンガリー語は特殊な言語なので、辞典ができたとしても購入者は限られており、限定500部の自費出版でした。

お葬式に帰るよりも意識があるうちに顔を見せ、改めてライフワークに理解を示し辞典が完成するまで看取り期を共有し励ましてあげたいと、家内は6歳と

4歳の娘を伴って慌ただしく帰国しました。

勿論、辞典の編纂を直接手伝うことはできませんが、他に何の望みも欲もなくひたすら906頁・45,000語の無機質な自費出版の製本を待ちわびる日々を送る義父の思いと心に寄り添うことができたと思います。義父の命が長くないことを知り家内の気持ちも察した出版元および編集担当者も、力の限り製本の完成が間に合うよう尽力していただいたとのことで、ただ感謝あるのみでした。

子供の学校のこともあり、義父が小康した機をとらえ、後ろ髪をひかれる思いで家内は帰国1ヶ月でNYに戻りました。

その後まもなく病状が急変しましたが、酸素マスクをつけた義父の病床に編集者が完成した辞典を走って届け、ほっとして喜んだ義父は辞典を抱き涙を流しながら息を引き取ったと聞いています。亡くなる直前の義父の気持ちは、「家族と別れるのは本当につらいが、辞典に看取られてあの世に行くので思い残すことはない。自分は幸せであった。有難う」とのことでした。

葬儀の時は、私も家内も帰国しませんでした。50年ほど前の日本の会社はまだ経済力が弱く、往復の飛行機代も高かったので、帰国費用は当然自費負担でした。仮に帰国費用が賄えたとしても、当時の日本の会社・社会は私も含め、そのような場合仕事を離れて帰国できる時代ではありませんでした。

以上